北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業／北海道里づくりアドバイザー情報誌

里づくり

第１１号　２０１５年7月

編集・発行/北海道農政部農村振興局農村整備課
〒060-8588　札幌市中央区北３条西６丁目
TEL　011-231-4111　/　FAX　011-232-4128
http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ns/nss/2_kannri/shidouindayori.htm

可憐なすずらん
写真提供：当麻町　小野寺　孝一 アドバイザー

CONTENTS

地域づくりリレーインタビュー
その活動の先に「地域への貢献」があるかを意識する
北海道大学大学院農学研究院　　講師　山本　忠男　さん

北海道里づくりアドバイザーレポート
組織の横の繋がりから見出す地域の魅力～酪農・温泉・湿原のまち豊富～
豊富町　尾﨑　滋　さん

実践！地域づくり
地場産食の研究とフットパスの取組～鶴居村ならではのスローライフを目指して～
鶴居村　服部　政人　さん

BOOKS

トピックス

―人に学び、地域に学び、今できることから始める―

北海道大学大学院農学研究院　講師　山本　忠男　さん

1971年　鳥取市生まれ
1999年　北海道大学大学院農学研究院博士課程修了
　　北海道大学大学院　助手
2007年　北海道大学大学院　助教
2012年　北海道大学大学院　講師

2007年から北海道中山間ふるさと・水と土保全対策委員会の委員として携わり、2010年に副委員長、今年度から委員長に就任。

その活動の先に「地域への貢献」があるかを意識する

―鳥取のご出身ですが、北海道に来られたきっかけを教えてください

私は高校まで鳥取で育ち、大学進学で北海道に来ました。そのきっかけは、できるだけ親元から遠く離れたところへ行こうと考え、海を渡った北海道か沖縄のどちらかでと悩んでいました。

その時に思い出したのが、高校生の時に訪れた北海道の風景です。いまでも鮮明に覚えているのですが、新千歳空港に着陸するときに見えた風景が、これまで自分の見たことのない広大な農村風景で、外国かと思うほど印象的でした。一週間ほどの滞在でしたが、天候が悪く、その飛行機からの景色が唯一の北海道らしい風景でした。その時の印象が強く残っていたんでしょうね、もう一度あの景観を確かめたいとの思いから、北海道大学に進学することを決めました。

その頃、農学といえば育種のイメージを持っていましたが、授業を通して、「土地を拓き、水を調えなければ、どんなに優れた品種であっても充分な収量を得ることはできない」、すなわち土地改良の重要性を感じたのと同時に、研究の面白さというか、自分の研究成果がどう世の中に活かせるのか、ということが身近に意識できることも魅力に感じ、この世界に留まってしまいました。

現在は、農業水利と水環境の保全を主軸にしながらも、グリーン・ツーリズムなどの農村計画に関する研究にも携わっています。

―北海道の農村地域の現状についてどう思われていますか

生産者価格の低下、ＴＰＰへの先行き不安感、低価格の輸入品というように、農業を取り巻く情勢をみると、経済的には大変と思いますし、高齢化と担い手問題、それに関連して地域コミュニティの低下など、さまざまな問題を抱えていると思います。その一方で、美しい農村風景やグリーン・ツーリズムへの取り組みなどをみると、まだまだ頑張っていけるようにも感じられます。

北海道農業は気象条件としては不利なところもあるでしょうが、広大な農地が広がり、またその生産基盤には、これまで多額の資本が投入されたことから、他府県にみられない優良な生産環境が形成されていると云えます。そういった環境があってこそ土地利用型農業が展開しているわけですが、本州に農産物を供給するだけ、言い換えると原料供給のみを担っていることに満足しているところがあるように思います。他の産業と同列に扱うことはできませんが、経営努力で新しい展開方向を模索する必要はあると思います。たとえば、十勝の川西農協や士幌農協のような例もありますし、個人の農家さんでも直接販売や加工によって付加価値を付けて収入を上げている人達もいるわけです。最近では、北海道米などに見られるように、生産量が多いだけではなく品質も向上しています。さらに、北海道ブランドの人気は高く、海外でも北海道の良いイメージが浸透しつつあると感じています。やり方次第ではより利益がでる状況が作れると思います。そのとき、どういう方向に進んでいくにしろ、行政のサポートが重要になると考えられます。農家収入が向上すれば、農業にかかわる人が増え、自ずと農業の担い手不足問題も解消されると思います。

近年、六次産業化が強く云われていますが、六次産業化が成功して農家の収入が向上しても、二次三次産業を生業としている人の収入を奪っているだけで、これでは地域全体として潤っているとは云えないと思います。結局のところ如何に消費者が望んで手にする生産物を提供できるかという原点が重要なわけですが、そのためには農家さんの努力だけでなく、消費者が農産物への適正な評価を持つことも必要となってきます。すでにいろいろなところで見られますが、食育にもっと力を注ぎ、地域の子ども達に食物の安全性だけではなく、地元農産物の消費を通して地域経済や地域の伝統的食文化を理解してもらい、地域への愛着を育む取組がもっと必要だと思います。

―ふる水事業を活用した取組で、特に印象に残る活動はありますか

ふる水事業を通して、多くの地域の取組を見させていただきましたが、その中でも農家さん以外の人が取組に関わっている団体は、活発に活動していた印象を受けました。

興部地区では、転勤で住民となった方が、数年後にはその地域を去ってしまうかもしれないという状況でも、地域の人達と一緒に活動をされていました。外からの視点で地域や活動を見ることができるため、このような方の存在は貴重ですね。参加された本人もすごいと思いますが、受け入れた方々もすばらしいと思います。

地元の人たちには、当たり前に感じてしまうことも、外から来た人は魅力を感じることがたくさんあります。また、農家ではないからこそ、その魅力に気付くこともあります。

活動内容にもよりますが、農家さんだけの活動の場合、仲間内の評価軸しか持たないため、活動の立ち位置がわからなくなってしまった例もあります。

周りの人々を巻き込むことで、仲間内だけではわからない、客観的な目線で活動を見てもらうことができますし、その後の活動の広がりにも繋がります。

また、最近の活動傾向として、次代を担う子ども達のために活動しようというものが多いように感じます。地域づくりには、子ども達に地域をどう託すか、という点も重要なことです。

ふる水事業ではありませんが、浦幌町の「うらほろスタイル推進地域協議会」の活動は、子ども達が学校の総合学習を活用し、町内の見学ツアーや地域資源を発掘するなどの体験学習を行い、最終的に地域活性化の企画を提案する取組です。この取組の良い点は、子どもたちが企画した提案を大人達が実際に形にしていくところです。

今の都会では、子どもを安心して外に遊びに出すこともできないですが、隣近所が顔見知りの農村地域では、子どもが一人で外に出ていても不安は少ないのではないかと感じます。それは閉鎖性というよりも、「地域で子どもを育てる」という考え方が残っているからだと思います。だからこそ、「子ども達のために」をキーワードにすると、普段は連携の難しい大人達も力を合わせやすいのではないでしょうか。

指導員会幹事会ではアドバイザーとして出席

―地域づくりに大切なことは何だと思われますか

取り組む活動が、地域にとってどんな効果をもたらすのか、活動目的を明確にすることが重要です。そして、その活動の先に具体的な「地域への貢献」があることが大切です。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、アドラー心理学やドラッカーのマネジメント論でも組織の目標を理解することが重要視されています。アドラーは、ありのままの自分を受け入れ、他人を信頼し、見返りを求めない「他者への貢献」が幸福感につながるとしています。これを地域活動に置き換えると、自分たちや地域の現状を理解し、協力して他者・地域に貢献するような目標を設定した活動こそが幸福であり、幸福であるからこそ続けられるというわけです。

指導員会での総括

何のために活動するのか、どういった活動ができるか、活動にどんな意味があるのか、それらを具体化し、そのうえで自分達は地域にどのような貢献ができるのかを意識できることが重要です。

―これからのふる水委員会についてお聞かせください

委員会の活動として、現地に赴き、活動団体から直接話しを聞かせていただき、そして委員が気付いたことに対してアドバイスを行う、といった今の方法は非常に良いと思います。

活動団体がうまく活動できなくなったり、活動方向がそれてしまった場合は、計画を根本から見直したり、中止という判断をすることがあってもいいですし、事業採択したから、当初に決めたことを決められた三年間でやらなければいけないということではなく、もし、もう一年事業として進めていけば良い結果が得られると見込める場合は、一年延長するという選択も委員会から提案していきたいです。

指導員会については、皆さん経験豊富な方々ですので、こちらが教えていただきながら、一緒に研修事業を進めていきたいと思います。

研修事業では、今年度からブロック別ミーティングが始まりますので、指導員同士の横の繋がりを強めていただいて、指導員会の更なる盛り上がりと、個々のレベルアップに繋げていただきたいです。

また、研修で得た知識や情報は、ぜひ地域に還元していただいて、意識を共有することで、地域での活動がより一層、高まることを期待します。

組織の横の繋がりから見出す地域の魅力
～酪農・温泉・湿原のまち豊富～

豊富町　尾﨑　滋　さん

尾﨑　滋（おざき　しげる）さん

1987年　静岡市生まれ
　　学生時代を京都で過ごし、湯治のため静岡から
　　豊富町へ移住
2011年　豊富温泉コンシェルジュ・デスクスタッフ
2014年　北海道ふるさと・水と土指導員

豊富温泉の仲間たちと綴るブログはほぼ毎日更新中です！
豊富温泉web→　http://toyotomi-onsen.com/

湯治療養をきっかけに移住

豊富町に移住してきたのは二〇一一年三月、あの東日本大震災と同じ月。

震災の時は地元静岡で豊富町での生活に必要な物をホームセンターで買い揃えているところでした。

豊富町との出会いはそこから二年ほど遡り二〇〇九年、これまた三月のことです。

当時、持病のアトピーが重症化し、あらゆる治療をしてもうまくいかず、東京のアトピー患者会の主催する講演会で豊富温泉を知り、藁をもつかむ思いで湯治療養に訪れたのがきっかけでした。

一時は自殺を考えるほど深刻な状態だったアトピーは一ヶ月ほどの滞在でみるみる良くなり、まさに「奇跡の湯」だと感じました。

しかし、帰ってから何ヶ月かするとまた少しずつ悪化してしまい、本州で体調を維持することが難しかったことに加え、北海道の僻地であるにもかかわらず若者がたくさん訪れる豊富温泉に可能性を感じて、移住を決意しました。

豊富温泉の湯

「うちの町にはなにもない」

豊富町に移住して一番気になったのが町民の町に対する「諦め感」でした。

駅のホームで年配の方が話しているのを聞けば、「あの頃は良かった、この街はもうだめだ」とマイナスな言葉ばかり。

かつて炭鉱の町として栄えていた頃を知っている年配の方からすると随分と寂しくなってしまったという印象が強いのかもしれません。

約四千人の人口比率から言えば高齢者が圧倒的に多く、若者の流出が止まらない現状からすれば地域としての将来を憂うのも無理はありません。

古くから町に住む人に豊富のいいところを聞いても「な～んにもないべさ」。

しかし、本当になにもないのでしょうか。

もちろん、みんなが嘆いてばかりいるのではなく危機感を持って様々な活動を行なっている団体や組織はたくさんあります。

しかし、それぞれが単体で行なっていること、町内であっても地域間の物理的距離があることによって、町民には届かず、他人事のように感じている人が多いのが現実です。

既存の組織や地域に囚われず、横の繋がりで動ける人が増え、身近に地域の活動に携わる人がいれば、もっと様々な活動への関心は高まるのではないかと思います。

フットパスを通じて横の繋がりを

現在は、横の繋がりを深める活動としてサロベツフットパス利活用プロジェクトを運営しています。

フットパスの活動を通じて、中心市街

フットパスイベントの様子

地と温泉地区、農村地区の地域間の繋がりを深めてきました。

豊富町のフットパスは町の中心市街地から出発して温泉街まで続く約七㎞のロングコースと温泉街周辺約二・五㎞を周遊するショートコースが有ります。

ロングコースは町と温泉をつなぐ一本道のコースで、その途中にはサロベツの植物や動物の足跡など豊かな自然を堪能できます。

真剣な目差しで植物観察する子どもたち

ショートコースではフットパスの魅力にプラスして天塩や遠別の地域おこし協力隊と連携し、フットパス＆スラックラインやフットパス＆川魚釣りなど、フットパス＋αの魅力あるイベントづくりをしています。

フットパスを通じ、豊富町役場や教育委員会、観光協会、農村生活文化伝承の会などと連携して町民の健康増進、子どもの体力向上、豊富町の新たな観光資源の確立、地元の食材のＰＲをしています。

来年度の全道フットパスの集い開催誘致を視野に活動中です。

フットパス自体を知ってもらい、地域に根付かせることも勿論ですが、フットパスを通じての繋がりを一番大切にしたいと考えています。

実際に様々な組織が様々なビジョンやミッションを持って利活用プロジェクトに参加していることで、他組織ではどのような目的意識の下、どのような活動をしているのかを知ることが出来る機会が増えました。

今後もフットパスを通じて横の繋がりを深めて行ければと考えています。

若者が自慢できるイベントを民間発信で

２年前から温泉関係者と酪農関係者の音楽好きな有志で「SAROBETSU HOT LIVE トヨトミサイル」というロックフェスティバルを主催しています。

主催の任意団体のメンバーの九割がＵターンしてきた地元の二十代から三十代までの若者です。

行政発信でなく、地元の若者達自らが「豊富町・道北を元気にしたい」「若者が友達に自慢できる地元の楽しいイベントを作りたい」そんな思いを持って活動しています。

スタッフや出演者は豊富町だけでなく、稚内から札幌まで広範囲に渡りその多くが地元の産業に携わる若者です。

ロックフェスティバス会場の様子

まだまだ始まったばかりで、集客も五百人前後と少ないイベントではありますが、毎年収益が見込め注目度も高まり、少しずつ成長していることを考えると、十分に持続可能な町おこしの起爆剤となりうるイベントだと感じています。

外の魅力を持ち込み、融合する事で更なる魅力を

地域おこしには「よそもの・わかもの・ばかもの」が必要だと言いますが、結局のところ「よそもの・わかもの・ばかもの」だけが頑張ってもうまくはいきません。

根幹となるのは地域に根づいた地元住民であり、それをまとめていくキーマンは外の世界を知るＵターンの人なのだと思います。

外を知って改めて地元の良さを認識する、そして他の魅力を地元に持ち込んだり、組み合わせたりすることで、更に魅力ある地域づくりが出来るのです。

幸いにも豊富町には全道的に有名な「豊富牛乳」や世界でも珍しい泉質を持ち全国各地から湯治客が訪れる「豊富温泉」、日本最大の面積を誇る高層湿原「サロベツ湿原」が有ります。

しかし、まだまだそれを地域として活かせていないのが現状です。

温泉を求め、多くの若者が移住したいと考えている豊富町は特異なのかもしれません。

だからこそ、そういった現状を地域が理解し、受け入れ、共に地域を盛り上げていければと思います。

SAROBETSU HOT LIVE トヨトミサイル

地場産食の研究とフットパスの取組
～鶴居村ならではのスローライフを目指して～

実践！地域づくり

鶴居村鶴居地区

鶴居村　服部　政人アドバイザー
鶴居村スローライフ実行委員会委員
ＮＰＯ法人美しい村・鶴居村観光協会
事務局長

タンチョウと湿原、酪農の村～鶴居村

鶴居村は、釧路管内のほぼ中央、雄阿寒岳東南の山麓に位置し、東西に二十三㎞、南北に四十二㎞で、面積は五百七十二㎢、人口約二千六百人の村で、東は標茶町、北は弟子屈町、南は釧路湿原国立公園を挟んで釧路市や釧路町に隣接しています。

阿寒カルデラ外輪山を貫流する雪裡川、幌呂川、久著呂川の流域に広がる雪裡、幌呂、久著呂の三原野で構成される農耕適地であり、気候は冷涼、夏季は釧路沖北太平洋で発生する海霧に覆われることもありますが、冬季は雪が少なく晴天の日が多い気候です。

酪農は、日本一の乳質を誇る村の基幹産業であり、九十戸（百世帯）の酪農家で約一万三千頭の乳牛を飼養しています。

鶴居村は、欧州に引けを取らない豊かな自然や美しい農村景観を有し、まさしく「鶴が居る村」が物語る天然記念物タンチョウの貴重な生息地であり、平成二十年には、「日本で最も美しい村」連合に加盟し、現在、美瑛町や黒松内町など全道六ヶ所の町村が美しさを競っています。

また、ナチュラルチーズに代表される魅力的な食、道内でも人気の高い温泉など、様々な有形無形の資源があり、ナチュラルチーズに関しては、平成十九年に開催された第六回ナチュラルチーズコンテストにおいて、最高賞の「農林水産大臣賞」を受賞するほどレベルの高いものになりました。

「鶴居村スローライフ実行委員会」設立

平成十六年、農業者が中心となり、村人との交流をテーマに、農村観光推進団体「鶴居村あぐりねっとわーく」が発足し、農家民宿、酪農体験、修学旅行の受け入れなど、鶴居ならではのグリーンツーリズム活動を十二分に取り入れた村民活動を主体においたメニューづくりを行い、平成十九年には地域一体となった取組に移行するため、鶴居村観光協会内に「地域づくり型観光調査研究委員会」を設置し、村民参画によるイベントの効果を検証し、魅力的な地域づくり型観光のメニューづくりなどに取り組んできました。

このように、産業や地域資源を生かした観光振興を進める一方で、村民の暮らしをベースにした取組も必要ではないかという考えを持つ仲間が集まり、村民自らが鶴居の自然の豊かさや地域資源の魅力を認識し、この恩恵を生かしながら、ゆったりと楽しく豊かな時間を過ごす鶴居ならではのライフスタイルを提案する「鶴居村スローライフ実行委員会」を平成二十四年四月に立ち上げました。

構成員には、チーズ料理やワインづくりなどを楽しみながら行う子育て世代中心の女性グループやグリーンツーリズムで都市と農村の交流を実践している酪農家、特産品により地域活性を図る商工業者の青年グループなど多様な活動団体などが参画しています。

平成二十五年度より「北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業」を活用し、活動に更に弾みをつけています。

「地場産ヨーグルト料理を食卓に」
～酪農郷の食文化を広めたい

「乳製品を使ったお料理を食卓に」を合言葉に、酪農文化が培った地域が愛する食文化の探求にも取り組んでいます。

平成二十三年度には、商工会が中心と

なった村内農商工連携により鶴居ナチュラルチーズを使った料理研究を行い、鶴居チーズ料理レシピ本「鶴居のむらレシピ」を監修しました。

地場産ヨーグルト料理の数々

平成二十四年度には、次なる乳製品による家庭料理の研究として、当実行委員会では地域の牛乳からなるヨーグルトを使った家庭料理に着目しました。

村内の農村女性地域活性化グループの協力を得て、世界のヨーグルト料理を研究する勉強会を定期的に開き、これまでに十品を超える家庭料理を作りました。

平成二十五年度からの二ヵ年は、関係者や村民対象に試食会を実施し、食卓への料理提供だけではなく食による商工観光などのメニューにも反映できるとの期待が高まっています。

今後は、地場産ヨーグルト料理のレシピ本を発行し、更なる乳製品を味わう文化を盛り上げ、酪農の応援につなげたいと考えています。

地場産ヨーグルト料理研究会の様子

鶴居村フットパス「草原と林道のコース」
～歩きながら村を知る

鶴居村は、移住者が七百人と多く、移住してきた人たちも鶴居の自然の素晴らしさを強く認識しています。

村民や観光客など多くの皆さんに健やかな時間を提供できればとの思いから、牧歌的な風土を生かした鶴居村ならではのフットパスが村民へ幅広く浸透するような工夫が必要だと考えました。

平成二十五年秋、村の中心部を出発し、見渡す限りに広がる牧草地を歩き、森林へと続くフットパスコース「草原と林道のコース」を、九月中旬から十一月中旬までの期間限定で新設しました。

村民対象フットパス探勝会

阿寒連峰を遠くに見渡せる起伏のある牧草地からカラマツ林に抜ける七・五kmのコースはバリエーション豊かな道が続き、村民でさえ新鮮な感動を覚えます。

秋の二ヶ月間と短い期間ですが、村内外延べ二百名ほどの皆様に健康的な楽しい時間を過ごして頂いています。

二千六百人の小さな村で暮らす

私は、ＮＰＯ法人美しい村・鶴居村観光協会に勤務しており、観光事業に従事しています。

協会名に「美しい村」が付いているのは、日本で最も美しい村連合の理念を取り入れているところからです。

「失ったら二度と取り戻せない、農山村の景観や文化を守る活動」は、地場産品を食し、フットパスで交流をする、そんな農村の暮らしを肌で感じ、訪ねる人も招く人も有意義な観光を創っていければと思います。

地域住民が参画し、農村の素晴らしさを掘り下げる、鶴居村スローライフ実行委員会の活動はまだまだ広がります。

フットパス整備作業

BOOKS

稼ぐまちが地方を変える―誰も言わなかった１０の鉄則

著者：木下　斉　発行：NHK 出版

高校生時代から地域活性化事業に携わってきた自らの体験をもとに、経営者視点でまちを見直し経営する実践方法を「10 の鉄則」として紹介する。

民間が自立して地域活性化事業を行うために必ず守らなくてはいけないことや、これからの「公共」を民と官が担っていくためにはどうすればいいかなど、地域づくりや地域で事業を始めたい人へエールを送る一冊。

■ トピックス ■

平成２７年度北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業に係る研修を次のとおり開催します。
申し込み方法などは、後日、各振興局等を通じてご案内いたします。

地域づくり研修会

日　程　平成 27 年 9 月 1 日（火）14:00～
場　所　センチュリーロイヤルホテル
（札幌市中央区北 5 条西 5 丁目）
３Ｆ　エレガンスホール
講　師　岩永　かずえ　さん

昨年度まで JA 北海道女性協議会会長を務めた岩永さんは、農業女性の活躍の場を広げるため北海道内で幅広く活動している。また、地場産品の付加価値化や地産地消にも積極的に取り組んでいる。

現地研修

日　程　平成 27 年 10 月 8 日(木)～9 日(金)
研修地　七飯町、森町
研修先（予定）　冨原観光果樹園、ついき農園、政田農園
みよい農園、山田農場チーズ工房など
独自の取組で活躍する農園を訪問します。

城岱牧場展望台

ブロック別ミーティング

【道東ブロック】　**日　程**　平成 27 年 7 月 30 日（木）～31 日（金）
場　所　常呂町多目的研修センター
【道北ブロック】　**日　程**　平成 27 年 11 月 10 日（火）～11 日（水）
場　所　旭川駅前藤田ワシントンホテル
【道南ブロック】　**日　程**　平成 27 年 11 月 19 日（木）～20 日（金）
場　所　せたな町北檜山温泉
【道央ブロック】　**日　程**　11 月上旬を予定
場　所　札幌市内

昨年度の様子

表紙紹介

北海道では代表的な花のひとつ「スズラン」。

表紙の写真は今年六月に庭の片隅で咲いたスズランです。

スズランは寒さに強く、繁殖力の強い植物です。

毒性を持つことから、動物に食べられることもなく、小さな株がいつの間にか他の植物を駆逐し群生することもあるほど。

地域づくりも、野山にひっそり咲くスズランのように着実に根を伸ばし、美しい花の群れを増やしていきたいですね。